

Richard Weiner,

*Race, Nation, and Market:  
Economic Culture in Porfirian Mexico.*

Tucson: University of Arizona Press, 2004,  
xi + 167pp.

さとう かんじ  
佐藤 勘治

メキシコにおいてポルフィリオ・ディアス (Porfirio Díaz) が独裁的権力を掌握していた時代 (1876~1911年, この間ディアスは1880~84年を除いて大統領の座にあった) は, ディアス期と呼ばれている。欧文では, 書名にあるように, ディアスの名からポルフィリオ期 (英語ではPorfirian Mexico, スペイン語ではPorfiriato) とするのが一般である。本書では, ディアス期を対象にして, 思想的背景を異にする3つの勢力の「市場」言説が分析されている。本書で分析の対象となっている「市場」言説とは, 当時の主要な経済誌や新聞, 個別の論考に現れた, メキシコの政治・社会・文化に対する「市場」の影響力に関する言説のことである。

本書で扱われる3つの勢力は, 以下のとおりである。第1は, 政権の中核において経済政策を主導したシエンティフィコ (científicos: 科学主義者, 本書では, アラン・ナイト Alan Knightに依拠して「開発主義派リベラル」〔developmentalist liberals〕と呼ばれている) であり, 第2章, 第3章で扱われている。第2は, カトリック教会勢力であり, 第4章で扱われている。ここでは, 社会カトリシズム (social Catholicism) の論客サンチェス = サントス (Sanchez Santos) の論考に限定して検討されている。第3の勢力は, メキシコ革命の先駆者だと評価され

ることもあるメキシコ自由党であり, 第5章のテーマとなっている。

著者によれば, ディアス期は, メキシコ史で初めて政治ではなく経済が主要な関心事になった時代だった。内戦や外国との戦争の時代を経て政治的安定を長期間維持したこの時代は, 全国的な鉄道網の拡大, 鉱山業の興隆, 輸出農産品の生産拡大など, 急激な経済成長がみられた。また, 新聞や経済誌の記事などを通して, 国内州間関税の廃止や金本位制への移行などの具体的な経済政策に関してだけではなく, 「市場」自由化の先住民への影響や国民形成との関わりが中心的テーマとして取り上げられた時代であった。本書では, 経済政策をめぐる議論ではなく, 後者の問題を論点の中心に据えている。同書が『人種, 国民, そして市場』を書名として掲げている理由である。

著者は, 「市場」(以下括弧を付けない) という用語に狭い概念規定を与えていない。著者は, 労働力, 土地, 資本, 商品, 国際市場など, 当時議論の対象となった様々な市場に関する言説を取り上げ, 「資本主義と物質的發展に焦点を当てた当時の論考を市場言説として解釈」する方法をとっている。ディアス期においては, 「市場がメキシコの国民的言説のなかで支配的象徴だった」にもかかわらず, 研究対象になってこなかったと著者は述べ, 本書が研究上の空隙を埋めることになるとその意義を強調している。

本書は, 雑誌論文や研究会での発表論文をまとめたもので, 単行本としては著者の最初の著作である。

序論的部分にあたる第1章「ディアス期メキシコの象徴としての市場」では, 本書全体の枠組みとともに研究史上の位置, 方法論が扱われている。ここでは, 結論部である第6章を含めて, 本書の特徴と主張をまとめよう。

本書で意図されている研究上の貢献のひとつは, ディアス期の経済思想をメキシコ史の枠組みに据えることでディアス期経済思想に関する誤った理解を

修正すること、つまり、当時の西欧経済思想の主流であった経済的自由主義の直接的適用だとする理解の修正である。鉄道国有化（1905年）政策のように、経済的自由主義の考えと対抗する経済政策がディアス期にとられているにもかかわらず、代表的な教科書においても「自由放任」主義とされる場合があると著者は批判する。この点については、最後の節で、再び取り上げたい。

経済思想の特徴を論じる際に本書がとる方法は、個別の経済政策をめぐる議論の分析ではなく、市場の象徴性を重要視することによる市場言説分析である。従来、経済を扱う場合、文化的環境が無視されてきたとし、経済思想を市場言説抜きで論じることができないと著者は主張している。ディアス期の市場の発展は、単なる経済上の現象ではなく、文化的プロジェクトでもあったとする。

ディアス期の市場言説からみえてくるのは、後に他の章の紹介で述べるように、「自由放任」主義を基礎付けている経済思想とは異なるものである。市場言説では、先住民の人種としての性格、市民概念、女性の役割など、国内の社会文化的状況との関係性こそが重要視されている。経済的自由主義が、個人主義や経済合理性を追求する経済人（economic man）の存在を前提にしていることからいえば、メキシコのディアス期の経済思想が前提としたはずの人間理解に注目することは、必要不可欠な作業だと思われる。

本書の第2章以下では、メキシコを構成する諸集団のなかでもインディオ認識が検討の中心に据えられている。（本書では、先住民についてIndianという用語が当てられている。この書評では、著者の用語法に基づいて、Indianにあたる日本語「インディオ」を用いる。）ディアス期において、初めて、経済問題との関連からインディオが重要なテーマになったと著者は指摘する。現代メキシコに目を転じれば、政治課題の中心に先住民問題が置かれ、しかも、経済政策と密接な関連をもって議論されている状況がある。この点で、本書は、優れて現代の問題関心のもとに執筆されたものだといえよう。

こうした問題意識の形成において著者が影響を受

けたとしているのは、アルバート・ハーシュマン（Albert O. Hirschman, 主著はHirschman[1977]）である。ハーシュマンは、個人の行動を形作るものとして市場の力に焦点を当てたと著者は述べ、本書ではハーシュマンの方法をメキシコに当てはめたとしている。ハーシュマンの前記著作は、欧米を対象に、経済的利益の追求が社会の崩壊を防ぐ方法として合理化される経緯を中世以来の思想的展開として明らかにしたものである。この書評を書くにあたって、評者はハーシュマンの上記著作に初めて目を通したが、確かに、ハーシュマンの論の進め方をメキシコの経済思想分析に応用してみたいと思わせる魅力を備えている。ハーシュマンの方法に依拠した先住民に対する市場の影響という新たな視点の導入は、著者の独自の観点として評価できるだろう。しかし、オリジナルで体系的な経済思想を生み出したとはいえないメキシコ経済思想分析への応用に、当然のことではあるが、ハーシュマンの著作のようなダイナミックな論の展開をそもそも期待することはできない。

次に、第2章から第5章で分析される市場言説を簡単に紹介しよう。論点は多岐にわたるが、ここでは、インディオ認識との関係を中心にして紹介する。

第2章、第3章では、開発主義派リベラルすなわちシエンティフィコの言説が取り上げられている。本書の用法に従って、以下単に「リベラル」と呼ぶ。

まず、第2章『『物質的・政治的行動は性格に従う』市場の経済的・政治的態度への影響』では、人種や社会階層によって市場の影響力に差があるとリベラルは考えていたことが明らかにされている。中産階級とエリート層についてみれば、市場の拡大はその不満を和らげ、結果として政治的安定をもたらすとリベラルは見なした。この場合、市場は政治力ももつのである。しかし、一方インディオに関しては、市場が経済行動にさえ影響を与えることはないと考えた。インディオは、怠惰であり、私有財産をもったとしても必要な分しか生産しないものと

らえられている。すなわち、インディオは「経済人」とは認められていない。しかし、急激な経済発展の結果もたらされた労働力不足の状況下で、インディオを労働者にすることが不可避の課題となっていた。そのため、強制的労働は批判されることがなかったし、労働力創出の手段として教育が重視された結果、義務教育制度が法制化されることになる。アセンド（*hacendado*）と呼ばれる大農園主もインディオと同様に、「経済人」とは認められていない。本書では、アセンド批判をリベラルは行わなかったとする通説的理解は誤りだと指摘されている。当時の代表的経済誌（*Semana Mercantil* や *Boletín de la Sociedad Agrícola Mexicana*）では、アセンドは、封建的スペイン人のイメージで判断され、生産に無関心だと批判された。リベラルからのこの批判は、「アシエンダはビジネスではない」とするモリーナ＝エンリケス（*Molina Enríquez*）の主張〔*Molina Enríquez* 1978, 162-165〕を繰り返したものだと言者は指摘している。リベラルは、アセンドに対しても、税金の導入などの強制力が必要だと主張している。リベラルの労働政策の基本は自由放任ではなく、国家統制にあった。

第3章「ひとつの『生存競争』 国際市場の力」では、リベラルの国際市場に関する言説が取り上げられている。国際市場の場合には、国内における市場の役割と違って、国家の存続を左右するほどの圧倒的政治力をもつと判断されていたと指摘されている。通説的理解では、比較優位の考え方がディアス期の対外経済関係を律していたと見なされている。しかし、ディアス期のリベラルはゼロサムゲームであるとの認識に立っていたと言者は指摘する。このため、結果的には、第2章でみたのと同様に、自由放任の経済政策は行われず、国家の介入が正当化されることになる。こうした考えの基礎となったのは、スペンサーの「適者生存」の考え方であった。

最大の対外的脅威と見なされたのは米国の経済的支配であった。フンボルト以来、メキシコ発展の潜在力として資源の豊かさが強調されてきたが、ディアス期には、生産力に重点が置かれ、メキシコは発

展が遅れた国として認識されていた。外国の経済権益は脅威であるとされる一方で、メキシコの実証主義的国家観に基づいて、「社会的組織体」（*social organism*）の発展が遅れている国の場合その内的成長は外部との関係によって成長・変化するものとされた。外部の影響を受け入れて自らが変化しなければ、いずれ外国に吸収・同化されてしまう。こうして、ヨーロッパ系移民の導入が求められたし、金本位制の導入、外資導入などが行われることになる。一方では、米国への警戒感とメキシコ国民の質に関する否定的認識から、外資規制策として鉄道国有化や鉱山法の見直しが課題となった。義務教育の法制化も、優等人種との生存競争に国民を備えさせる有効な方法として行われた。「先住民を進歩的な階層に変えることは、（中略）アメリカにおける我々の社会的特質を維持するために不可欠な条件である」とのフスト・シエラの言説が引かれている（p.66）。教育は、労働力の形成という側面だけでなく、メキシコ人をたくましくし、弱者が強者により淘汰される世界で生き残る条件を創ることになる。結局、リベラルにとって問題だったのは、経済的成長そのものではなく国家の主権維持であった。

第4章「『自己中心の資本主義』 サンチェス＝サントスの言い方にみられる市場の悪弊」では、社会カトリシズムの代表的論客サンチェス＝サントスが市場を極めて否定的な力として認識していることが明らかにされる。彼にとって市場は、貧困や家族の崩壊など社会問題の原因であった。経済は市場ではなく慈善や博愛といった道徳的・宗教的原則によって運営されるべきである、と彼は主張した。

レオ13世の回勅レム・ノヴァルム（1891年）にみられるヨーロッパの社会カトリシズムに基づいて、サンチェス＝サントスが批判の対象としたのは、西欧自由主義経済にみられる個人主義、物質主義、極度の自由、平等などであった。社会的調和は個人的欲求と社会的義務の間の適切なバランスで成り立つ、と彼は述べている。ここで注意しなければならないのは、リベラルを攻撃対象としたのではないという点である。リベラルも秩序や集団性を重要視してい

たのであり、この点での違いは見いだせない。

ただし、サンチェス＝サントスは、労働者やインディオの窮状に目を向け、資本主義を批判する。無産層の誕生は、市場における自由の濫用の結果だと認識されていた。彼は、多源発生説を認めないカトリック的立場から、インディオの窮状についても、人種主義的に判断せず経済的問題だとする。市民社会の基礎であるべき家族の破壊もまた、市場をその原因だとする。市場賃金が家族を養えるだけの額に達しないことで、家庭における男女の役割が破壊されたのである。リベラルの賃金論である需要供給論とは対照的に、国家介入の必要性和家族賃金が提唱されることになる。

彼によれば、交換とは社会的相互依存関係であるべきである。「商業の自由の濫用」としての投機など経済的不均衡の原因は、「野獣の利己主義」であると見なされた。

続く第5章「メキシコ自由党の市場言説における象徴の移行 『圧政』から『隷属』へ」では、メキシコ自由党の市場言説が2つの時期に分けて検討されている。前半期（1900～06年）は自由主義、後半期（1907～11年）では急進主義を特徴とする。ただし、急進化した後半期でも、メキシコ自由党の市場言説は、ディアス期末期や革命期の支配的な言説との親和性がより多くみられると示唆されている。

前半期における市場言説は、象徴的役割からみたとき、弱く、ぼんやりしたものだったと指摘される。経済的搾取よりも、政治批判すなわち圧政が批判の対象となる。言論の自由、政治的民主主義、国家と教会との分離に焦点が置かれたのである。この時期の自由党のイデオロギーである社会的自由主義は、資本主義に対して両面的な見方をとっていた。資本主義の否定的側面たとえば工場・鉱山労働での抑圧は、労働組合、国家の介入、労働法による規制により解決がはかれるとされた。一方、農村労働では労働の市場化は農民やインディオの解放として把握された。たとえば、アセンダードを前資本主義的封建領主と位置付けることで、自由党はユカタンにおけるヤキの強制労働を批判している。つまり、市場の役割は二面的にとらえられていたのである。土地分

配に関しては、市場ではなく政治力での解決が主張され、レフォルマ期の政策と同様に小土地所有者の創出が唱えられた。ただし、レフォルマ期の自由主義者とは異なり、インディオ共同体所有地の私有地化については、進歩ではなく社会悪ととらえ、その返還を訴えている。著者によれば、この時期の自由党は、メキシコのインディオの起源を尊重していたが、メキシコのモデルとしてインディオ世界をとらえていたということではない。また、開発主義派リベラルと同様に、自由党も、教育によるインディオの国民性の強化を求めている。

1907年以降、フロレス・マゴン（Flores Magón）をはじめとする自由党の指導者たちは、アナキズムへの傾倒を公に表明するようになる。市場は、根本的に抑圧的だとされ、市場の国家統制も不可能であると主張されるようになる。「奴隷」という言葉は、前期においては、アシエンダのペオンを示すものとして用いられていたが、後半期には、賃労働者を示す言葉にかわった。資本の同盟者としての国家は本質的に労働者の敵であると見なされ、資本主義を改良することは不可能との認識にかわっている。インディオに関する言説は、後半期では、ほとんどなくなると著者は述べている。資本家と労働者という二分化された階級認識によって、インディオは労働者階級と見なされ、独自の重要性をもたないとされたからである。労働者階級の集団性は強調されたが、その場合でも、先コロンブス期の文化における集団性への回帰ではなく、近代的文明に位置付けられる連帯として理解された。土地に関しては、私有に反対し共有を主張したが、これも、同様の観点からのものである。1910年革命において自由党は、「土地と自由」という標語を採用したが、伝統的インディオ社会を尊重しない点で、革命期のサパティスタとは異なっている。

はじめに指摘したように、本書で扱われているディアス期の市場言説分析は、現代メキシコ政治との関連からも興味深いものである。現代メキシコに



においても、市場自由化に関わる問題は、政策論議やマスコミの論説のなかで重要なテーマとなっているからである。なかでも、現行の新自由主義的政策が先住民社会に与えている影響については、否定的言説が聞かれることが多い。著者は、現代メキシコの諸政策が「新ディアス期的」(neo-Porfirian)と批評家によって性格付けられることがあると指摘し、本書の現代的意味に注意させている。その際、著者は、19世紀ラテンアメリカ経済思想が西欧経済思想の真似に過ぎないと把握する傾向を批判し、前節で紹介したように、各勢力ともメキシコの場合には国内的な社会状況との関連から経済問題を論じていると主張している。

ディアス期経済思想の一般的理解として著者が批判の対象として参照している教科書は、Skidmore and Smith (1997) である。同書では、「ラテンアメリカでは19世紀後半を通して経済的自由主義が揺るぎないものであったと述べる事ができる」とまとめられている [Skidmore and Smith 1997, 44]

確かに、評者が大学においてこの時代の経済思想を扱うとき、欧米経済自由主義思想の圧倒的影響を強調することが多い。ディアス期末期の経済政策における国家統制の強化に関しては、行き過ぎた経済自由主義政策の見直しとして論じてしまう場合もある。本書の主張に従えば、国家統制の強化はディアス期自由主義思想に内在したものと理解すべきだということになる。本書の重要性はこの点にある。評者もこの見解に同意できた。

しかし、一般的に述べれば、日本においてディアス期における自由主義思想が問題にされることは少ないと思われる。というのも、日本における教科書的記述では、シエンティフィコは、自由主義者として把握されるのではなく、実証主義者としての側面に重心が置かれているからである。たとえば、松下 (1993) を参照されたい。経済政策に関しても一面的に自由放任と論ずる傾向はみられない。

こうした日本の研究状況とは異なり、本書では、ヘイル『19世紀末期メキシコにおける自由主義の変容』[Hale 1989] に基づいて、シエンティフィコを自由主義者として論じている。ディアス期実証主義

を自由主義の変容だとする理解は、通説となっている。ただし、著者も指摘しているように、ヘイルの上記書では経済思想を対象としていないし、ディアス期経済思想については他の代表的研究書をあげることができない。こうした事情は、残念ながら、日本の研究状況にも当てはまる。さらに日本の場合には、ヘイル説の紹介や検討がまだ不十分であるように思える。

著者独自の貢献である第4章を除いて、本書で検討されている言説の多くは、違った観点からではあるがすでに多くの研究によって言及されたものである。特に先住民に関する言説は、Zea (1968) や Powell (1946) の研究にみられるように、以前から論じられてきたテーマである。本書は、この点だけからみれば、それほど新たな知見を与えてはいないが、市場言説という切り口を導入し多面的に論じたことで、ディアス期政治経済思想の核心に迫っているように思われる。上記に加えて、本書が、本文108ページのコンパクトな書籍である点も重要だ。本書は、「市場」という言葉のとらえにくさはあるものの、ディアス期政治経済思想の全体像を知るための入門書としての役割も果たしているといえよう。

最後に、本書での主張を受け入れた場合、メキシコ革命解釈との関係で重要な論点が生じることを指摘しておきたい。シエラやモリーナ＝エンリケスを当時の経済政策の中核をになったシエンティフィコスと同等に扱うことから生じる問題である。というのも、たとえばモリーナ＝エンリケスは、革命期を代表する論者でもあるからである。メキシコ革命はシエンティフィコ支配の否定・排除として論じられることが多い。本書の分析からは、このメキシコ革命解釈には多くの留保が必要だということになる。

## 文献リスト

### < 日本語文献 >

- 松下マルタ 1993. 「社会ダーウィニズムからインディヘニスモに向けて ラテンアメリカ思想史における人種問題の位相」 歴史学研究会編 (野村達郎・松下洋編集担当) 『19世紀民衆の世界』(南

北アメリカの500年 第3巻) 青木書店 .

< 外国語文献 >

Hale, Charles A. 1989. *The Transformation of Liberalism in Late Nineteenth-century Mexico*. Princeton, N. J.: Princeton University Press.

Hirschman, Albert O. 1977. *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*. Princeton, N. J.: Princeton University Press. ( 邦訳は佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局 1985年 ).

Molina Enríquez, Andrés 1978. *Los grandes*

*problemas nacionales [1909] [y otros textos, 1911-1919]* México: Ediciones Era.

Powell, T. G. 1946. " Mexican Intellectuals and the Indian Question. " *Hispanic American Historical Review* Vol. 48.

Skidmore, Thomas E. and Peter H. Smith 1997. *Modern Latin America*. 4th ed. New York: Oxford University Press.

Zea, Leopoldo 1968. *El Positivismo en México: Nacimiento, Apogeo, y Decadencia*. México: Fondo de Cultura Económica.

( 獨協大学外国語学部教授 )